信仰階段をアンスロポモフィズムといふ。

物象が強く印象されると人格化は遲れる。弱ければ神靈の自然的形態は次第に忘れられて自然的色彩は稀薄となり、人文的色彩が濃厚となつて神だか人間だか解らなくなつて、人間的神格だつたものが神靈的人格に變化する。例へば希臘羅馬の太陽神アポロー、日本の嵐の神須佐之男命、國土の神大國主命等はこの例である。太陽神アポローはもと太陽そのものだつたが、やがて太陽を拔け出して之を御するやうになる。そして自然的色彩を脱して人文的傾向を加へて來る、アポローとニンフのクリメンとの間に生れたフアイーツンは、自分の父がアポローであるかを確める爲に天に登る。しかしアポローは燦爛たる玉座に坐して、四圍は光明赫灼としてゐたので、彼は眩しさに堪へられなかつた。それを見たアポローは後光を外して息子を身近く招き、父はお前の欲する物を與へるといふ。フアイーツンは太陽の二輪車を求めてやまないので已むなくアポローは與へたが、彼は御し損じて車外に投出され、二輪車は天空を驀走し或は地上に近づいて、森林は燒かれ町々も火事を起して灰燼に歸したといふ。この神話ではアポローは未だ自然的素質と人文的色彩の兩面を持つてゐるが、後になると全く人格化されてキューピッドに矢で射たれたり、ヂユピターに下界へ追放されて人間生活をするやうになる。かく自然的物象そのものであつた神靈が人格化され始めると、人間界の生活が反映して漸次人間的な色彩が濃厚になる。

人類の生活信仰が進展するにつれて、神話は民族的移動、融合、改變を來すやうになる。アニマチズムに於ては風神ヘルメスは、風それ自身であるが、アニミズムになると風神が風を呼び起すと考へる。そして風が空を自由に飛び廻ることから鳥を以て表徵され、傳令、交通にも結びつけられる。又風の音樂的リズムを感じて音樂神となり、その速度から雄辯の神ともなり、反逆的惡戲的の形狀から惡智慧の神ともなる。

人智が一層進むと形而上學的思想が入り、抽象的な思想を神靈化し人格化するに至る。希臘や日本に於ける宇宙創生の神話はこの一例で、希臘では「太初に渾沌(カオス)あり、次に愛(エロス)が生じ、次に渾沌より闇(エレボス)と夜(ノクス)が生れ、その結合から光明(エテル)と晝(ヘメラ)が生れた。大地(ゲア)は愛(エロス)に促されて天空(クラノス)や海や山々を生み、更に愛の神エロスによつて天空神ウラノスと、大地女神ゲアとは抱擁してチタン神族やその他の父母となつた」とあるし、日本の神話にも「男神伊弉諾尊(いざなぎのみこと)と女神伊弉冉尊(いざなみ)とが、天つ神の命によつて天降り、夫婦の作法をして國土初め山川草木などや諸神を生まれた」とある。未開人の神話には突然森羅萬象が出現するが、文明人の神話には希臘神話にかける愛の神エロス、我國の天つ神即ち天之御中主神、高御産巣日神、神産巣日神等に見られる如く、萬物を生ずるには何か原動力が働くと考へ、それを神靈化するのである。

神靈が人格化されると今迄の信者を失ふが、それに宗教的な思想が加はると絶對的な超自然的存在

を信ずるに至る。然しそれもやがて又人格化されて終ふ。エホバはその一例である。

現代では希臘神話も羅馬神話も、傳說或は文學として愛する人々が多い。

青春型の神々

神が人格化された時に、そのタイプが老年型か青春型であるかは、先づその神の支配する物象の自然的形態により、次にそれを信仰する國民性或は民族性により、又時代によつて違つて來る。形態については、天空、大地、海洋等は廣大なもの永久的なものと考へられ、老人、智慧といふ概念に結びつき易い。だから天空神や大地神等は老年型として取扱はれ、嵐、風、雷、火等は力や精力等が考へられて、若人の活氣ある生活や反抗心を想はせる。太陽は萬物の父と考へられたり、永久の存因を思はせたり、矍鑠として天空を飛び廻ること等から老年型にもなるが青春型にもなり得る。月は處女を聯想させるので、青春型である。

次に職能から判斷すると、全智全能の神、冥府の神、復讐の神等は老年型に考へられ、美の神、技術の神、戰爭の神、音樂の神等は青春型となる。次に比較的明るいとか、華やかであるとか、平和の愛好者であるとか、戰鬪的であるとか、平等を重んずるかどうか等の國民性や民族性は、その信仰する神々の性格に反映して具象化される。だから同一の神が數種の民族の間に崇拜せられる時に、ある

民族では老人型とし、ある民族では青春型として取扱ふ場合がある。例へば酒の神バッカスは、原始では大地母神の系統をとつてゐたが後には職能が限定されて酒の神となつたもので、或地方では老年型とし、或地方では青春型に考へられてゐる。

又同一の物象から生ずる神靈でも一方には老年型を持ち、一方には青春型を持つてゐる事も珍しくない。例へば太陽神はその代表的なものである。ギリシヤではオリンポス十二神中、アポロ神は華やかな神で青春型となつてギリシヤ人の明朗な氣質を思はせる。バビロニアの太陽神であるギリシヤのヘフエストやローマのバルカンは原始では、火そのものの觀念から青春型だつたが人智の發達につれて、火の起原を別に求めることになつて、彼は杖を持たされて跛や老人と考へられるやうになつて老人型となる。

次に青春型の神々をあげて見よう。

太陽神アポロー（希臘）

太陽の男神アポローは音樂の神として名高い。天空の男神ゼウス（ローマのヂユピターと同一視さる）と、レトー（ローマのラトナ）との間に生れたもので、月の女神アルテミス（ローマのダイアナ）と雙生兒である。彼は多樣な職能を有してゐる。即ち、

守護神、懲罰神、疫病神、牧畜神（狩獵神）、豫言神、音樂神、社會的建設神、太陽神、未婚神。

彼が、かくも十種の性能を持つに至つたのは、彼への崇拜が餘りにも昂まつて來た爲に、他の地方神の職能を漸次奪ひとつて了つたからである。彼の性格は血氣に充ちた青年の如く激し易く、正義を愛し神に敬虔なものをよく守護した。神に對して不敬なものが現れると、どしどし處罰して行つた。彼は銀の矢を以て射斃すのであつた。だから人が急死するとアポローの矢に射たれたと信じられ、疫病神ともされたのである。彼はもと豫言神として知られ、又醫術の神として有名ではあるが、それは醫術の神パエオンの職能を奪つたものとされてゐる。

アポローは一ヶ年人間界に住んだといふ。それは、彼の息子のイスキュレーピアスが彼から巧みな醫術を敎つて死人を生き返らせた爲に、冥府王がゼウスを說いて雷電で息子を殺させたので、アポローは怒つて雷をつくつたキクローブ達を射殺した。それを知つたヂユピターは怒つて彼を人間界へおとし、而かも人間に使はれる羊飼ひをさせたのであつた。

アポローは風の神ヘルメス（ローマのマーキユリー）から彼が發明した龜の甲羅で作つた竪琴を貰つて、常にそれを持つてゐるやうになつて、オリンポスで神々が會合する時にはそれを彈いた。そして彼が率ゐた九人のミューズ達がそれに合唱した。地方的な樂器で豪快な音のする二重笛に對して、七絃琴（ライラ）は都會的な樂器で貴族的な音調を持つてゐる。この二器の勝負でアポローの勝つたことは、ギリシヤ人の音樂趣味の傾向を示すものである。

アポローは未婚神として崇められてゐるが、彼は女神や女精や人の娘達と契つたこともある。然し彼には定つた妻もなく、彼の初戀は愛の神エロス（ローマのキユービッド）を彼が嘲つた爲に、エロスに戀の矢を胸に射たれて川の神ダフニを激しく戀するやうになる。ダフニは彼を嫌つて逃げ廻るがアポローは猶も追ひかけて、切なる胸を打明けるがきかない。彼の求愛に困じ果てたダフニは遂に父の救ひを乞うて、月桂樹に變じて了ふ。アポローは悲しんで「お前はもう私の妻になることは出來ない、私の冠になつてくれ、俺は琴と弓でお前を飾つてやらう、永久の青春は私のものだからお前は何時も青々としてゐられるだらう」と云ふ。それから月桂樹はアポローの神聖樹となつたのである。

青春の女神ヒーベ（又はヘーベ）

希臘神話では彼女は天空神ゼウス（ローマのジユピター）とその姉で妻であるヘーラ（ローマのヂユノー）との間に生れたもので、彼女の兄弟は戰神アレス（ローマのマルス）及火神ヘフエスト（ローマのヴアルカン）である。彼女は美しく愛らしく、ゼウスの給仕をして常に彼の傍に侍した。そしてオリンポスで天空神ゼウスが神々を招集する時には、その宴會で神々に神酒を酌して廻つた。アポローは竪琴を彈き、ミューズ達がそれに和して唄つた。彼女は英雄ヘルクレスが昇天して星座に加へられて、彼女と結婚する迄は餘りロマンスを持たない。

英雄ヘルクレスは天空神ジユピターと人間のアルクミーニとの間に生れた子供で、嫉妬深いヂユノ

ーの爲に彼が未だ搖籃に寢てゐる頃に二匹の蛇の爲に殺されやうとしたが赤坊だつた彼は小さな手で蛇を締殺した程の怪力無双の男である。その後ヘルクレスの十二の仕事といふ命懸けの冒險を次々に仕遂げてから、妻を貰つて幸福に暮す中に、不圖した過ちで妻を喪つたので、自ら火焔に投じて人間の母から受繼いだ部分を燒き盡して天に昇り、ジュピターの命によつて星座についた。

美と愛の神アフロデート（羅馬キューピッド）

愛の神エロス（羅馬ヴィナス）

エロスは美と愛の神アフロデート（ヴィナス）と戰鬪神アレス（マルス）との子である。そしてアフロデートはバビロニアに古くから崇拜されてゐた大母神イシタールで、一方では狂暴な戰鬪神であり、一方では植物や耕作の神、性愛の神であつた。それが埃及へ入つて豐饒の女神イシスとして崇拜せられ、カナン人やフィニキヤ人に依つて、ススタルテとかアシテロトの名の下に知られるやうになり、それが男系制度の希臘人に取入れられてからは、戰鬪的半面を忘れられて美の女神にされた。そして愛の神エロスをその子として愛の神にもされた。イシタール時代に持つてゐた戰鬪のシンボルの槍を捨て、女性の表象である鏡を持ち、やがて羅馬に入つてヴィナスとなつて一層愛敬されるやうになつた。

希臘人の技巧はアフロデートをして、天空神ゼウスとヂオーネの子とし、一説にはクロノスが父の

ウラノスから切斷したリンガが海に落ちて、それに集つた泡から生れたとも云はれてゐる。アフロデートは火の神ハフエストの妻だつたが、夫を嫌ひ戰鬪神アレスと契つて、愛の神エロスを生み、その上樣々の神とも契を結んだ多情の女神である。

彼女等はヴィナスとキューピッドとなつて羅馬へ入ると先づヴィナスはヂユピターとヂオニーの娘とされ、一説には海の泡から生れたものとされた。彼女は最も醜い神ヴアルカン（火神）の妻になつた。彼女はセスタと稱ぶ刺繍の帶を持つてゐた。その帶には戀愛を唆る力が籠つてゐた。それでトロイ戰爭の眞最中、ジュピターでさへもその妻ジュノーがヴィナスからこの帶を借りて締めてゐたら、初戀の乙女に接するやうな態度をとつたと云はれる。

その子のキューピッドは、ヴィナスに連添つて神や人間の胸に戀の矢を射込むので有名である。ヴィナス自身も誤つてその矢に傷つけられて、アドンスと戀に落ちた。キューピッド自身でさへも、取扱を誤つて自分の胸を傷つけて、サイキと戀に落ちた。又アポローがキューピッドの矢に胸を打ち拔かれ、ダフニに片戀をした話は前に述べた。

彼女等のタイプはアフロデートもヴィナスも共に前身はバビロニアのイシタールの分身であることは明かで、元は大母神であるから老年型であつた譯だが、彼女等はイシタールから美と愛のみを受繼いだ爲に、美や愛や若さを想はせるので、青春型に屬するやうになつた。然し彼女等は美名にかくれ

た毒婦でもあつた。エロスやキユーピツドは清純で、眞の青春の若々しさを現はしてゐる。

英雄ペルセウス

ペルセウスはヂユピターとダナイとの子で、祖父の爲に箱に入れられて海に投ぜられ漁師に捨はれて、やがて國王の許で成人した後マーキユリ（ヘルメス）の翼靴を貸與されて、ゴーガンを退治してその首をミネルバ（アテナ）に贈つた。その時ゴーガンの首の血からペガスス（翼の生えた馬、この頃ガソリンのマークになつてゐる眞紅な馬）が生れ、ミネルバがそれを馴してからミューズの女神達に贈つた。

ペルセウスが猶も飛び續けてエチオピヤに渡ると、そこの王セフエウスと女王カシオペアの娘アンドロメダが、既に犧牲となつて海の怪物に食はれる所だつたので、それを救つて夫婦となつた。彼等は死後星座におかれた。これらの星座は夏のヘルクレスが沈んで了ふ秋から冬にかけて、セフエウス、カシオペヤ、ペガスス、アンドロメダ、ペルセウスの順に昇り輝く。

智慧の神ミネルバ（希臘のアテナ）

智慧と技術の女神として有名なミネルバは、男に對しては農業と航海術を敎へ、女には糸を紡ぐことや機を織ること、裁縫を敎へた。希臘ではゼウスと智慧の神メチスとの子であつて、ゼウスはその子の生れるのを恐れ、母親と共に嚥下したが後に彼は鎧に身を固めてゼウスの頭から生れたと

云はれてゐるが、彼女は元來大母神であるらしく、農業や技術の神であり一方戰鬪神でもあつた。それが希臘に移入せられてこんな異常分娩をして、オリンポスの神に列せられ智慧と技術の神となつた。そして羅馬に受繼がれてヂユピターの娘にされるが、母親はなくヂユピターの頭から生れたとされたのである。そしてその職能も次第に狹められて行つた。

雷電は彼女の發明したものとされ、彼女はそれを火神ヴアルカンに與へた。彼女は處女神で誰をも受入れない性情を持ち、その所有する楯の中央には英雄ペルセウスが殺したゴーガンの一人であるメヂユーサの首をつけてゐた。メヂユーサは美しい處女で、殊にその長い美髮を誇りとしてゐたが、仕舞には誇大妄想を起してミネルバ以上に美しいと思つたので、遂にミネルバの怒をかつて凡ての美を失ひ、その頭髮は悉く蛇と化し、身體は怪物とされて恐ろしい形相の爲に、それを見たものは石になると傳へられるやうになつた。彼女は戰爭好きではあつたが、戰爭の神マルス（希臘のアレス）程は氣性が激しくなかつた。それでもアテネ市の所有について、海神ネプチユーン（ポセイドン）との爭に勝つたので、それを所有することが出來た。

機織や刺繍が非常に優れてゐた爲に、慢心して不信仰となつたアラクニといふ處女がミネルバの技術を馬鹿にした時、彼女は先づ老母に變裝して行つて、彼女に親切な忠告を與へた。それでも彼女は慢心しミネルバはその織物の模樣によつて僭越な人間に對する神々の怒を表現して、アラクニ

に早く競爭を思ひ止まらせやうとしたが、アラクニは却つて神々を侮蔑するやうな圖案をつくつたので、遂に彼女も怒つて織物を破りアラクニの額に手を觸れて、罪を恥ぢさせた。そこでアラクニは縊死した。こんな不遜な女にもミネルバは慈愛をかけて蘇生させ、蜘蛛にしたといふのである。この話はミネルバの愛の深さを語る許りでなく、古代のギリシヤ人が如何に技術を重んじたかを物語るものである。ミネルバが青春型の神であるのは、その技術よりも優美な性情によるものである。

酒の神■ツカス（希臘ヂオニソス）

バッカネも亦青春型の神として取扱はれてゐる。彼の生立はミネルバに似て、異常分娩に屬す。卽ち彼は天空神ゼウス（羅馬ジュピター）とセメレー（羅馬のシミリ）との子である。セメレーは大地（ゼヅル）から來てゐる。從つてもとは農業や穀物に關する大地母神で、その子バッカスが職能を繼ぎ穀物の神となり、更に局限されて葡萄の神、酒の神と變化して來た。

ゼウスの妻で、嫉妬深いので有名なヘーラ（羅馬のジューノー）の術策におちて、セメレーはゼウスの雷電に打たれて燒け死ぬ。その時胎兒は六ケ月であつたが、ゼウスはその兒を取出して自分の股に入れ、月滿ちるまでそこで養つた、その子がヂオニソスでバッカスである。生れてからもヘーラは尙も嫉妬をつづけ策謀するので、ゼウスは叔母達に女の子として養つてもらつたり、又仔山羊に變裝させてニサ山のナイシードと稱ばれる女精達に養成させた。彼女達はその功によつて後にヒ

ヤデスとして星座に加へられた。それは晩秋から初冬にかけて牛座にあつて、プレアデスと共に散開星團の模範形として、我々に最も親しみのある星群の一つである。

バッカスは成長するに及んで、葡萄樹の栽培とその果汁を得る方法を發見した。然し嫉妬深いヘーラは猶もしつこく、遂に彼を氣狂ひにして了つた。ここで彼の放浪生活が始まり、世界中を彷徨する。その間方々で彼の技術を敎へ、又は自分に叛く者は氣狂ひにしたりして、神である威嚴を示したので信仰された。その後遂にギリシヤに歸り、段々と信仰を增して、オリンポスの神に加へられるに至つた。

彼の生立は、他の民族から移入されたものらしく、元來は農業耕作に關した神で、次第にその職能が分化せられて葡萄の神、果酒の神となつて各地に傳播し信仰せられ、希臘に入つてヂオニサスとなつた。その合理化から母は大地女神と思はれるセメレーが選ばれ、奇怪な出產法まで案出された。それが羅馬に受繼れてバッカスとなつたものらしい。

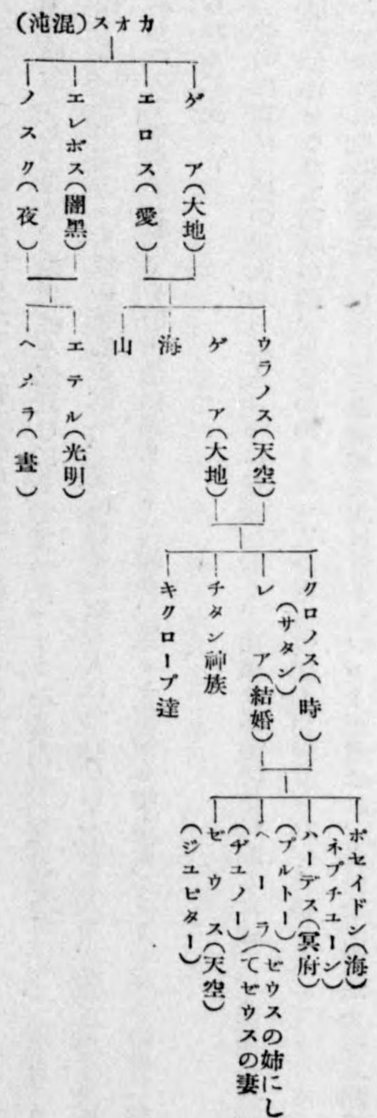
この神の祭典は、全く底拔騷ぎで、その熱狂的な合唱は希臘劇の起源をなしたと云はれ、劇場の保護神としても又文化法律の愛護者としても敬愛された。築地小劇場の使つてゐる葡萄の紋章も、恐らくこれからとられたものであらう。

彼と青年を結びつけるのは、その熱狂的な祭典によるものであらう。然しある民族では鬚髯のあ

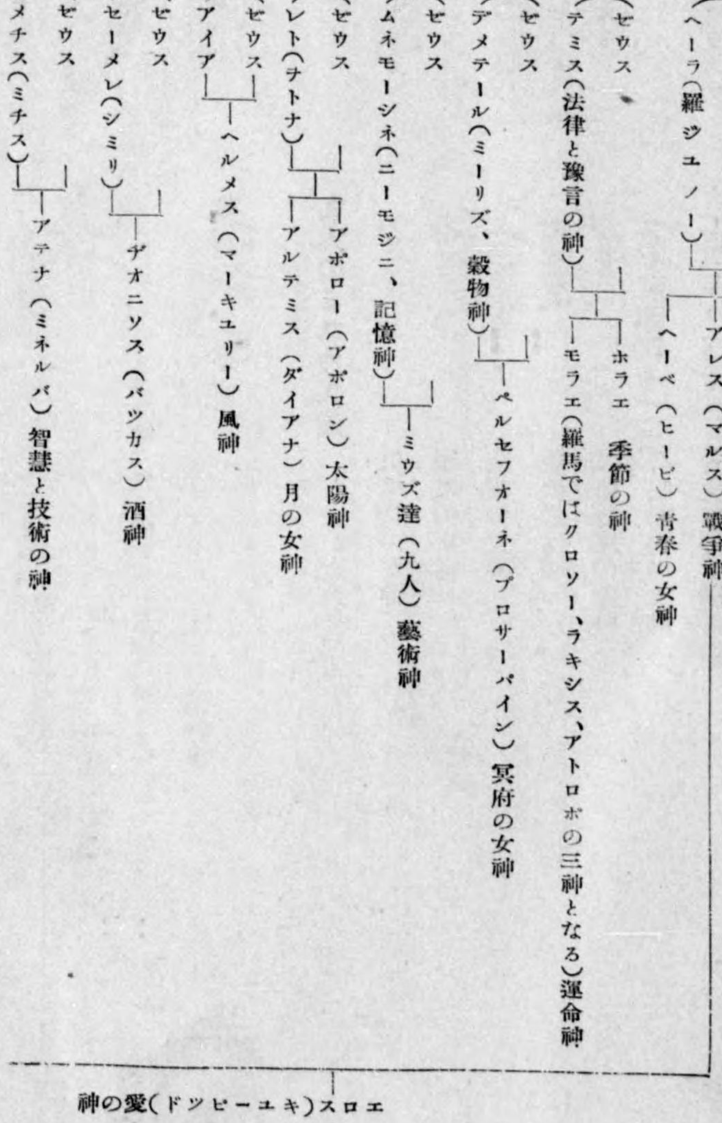
る老年型を以て表現されてゐる。

次に複雑な神々の關係を理解し易くする爲に、系譜を表に示しておく。

希臘神話系譜



ゼウスの妻達とその子供達の系譜



（ゼウス
ダオーネ（ダイオニ）
アフロデート（ヴイナス）美と愛の女神

（ゼウス
アルクミーニ（人間）
ヘルクレス（英雄、後に神となり星座に加はる）

（ゼウス
ダナイ（人間）
ペルセウス（同）

九人のミユウズ達

1 カリオペ　Kaliobe　叙事詩の女神
2 クレイオ　Kleio　歴史の女神
3 メルポメネ　Melpomene　悲劇の女神
4 ユーテルペ　Euterpe　音樂の女神
5 エラト　Erato　結婚饗應の女神
6 テルプシコレ　Terpischore　合唱舞踊の女神
7 ウラニア　Urania　天文學の女神
8 タレイア　Thaleia　喜劇の女神

9 ポリムニア　Polymnia　辯論と所作の女神

オリンポス十二神

1 ゼウス　Zeus　（羅馬ジユピター Jupiter）天空神
2 ポセイドン　Poseidon　（ネプチユーン Neptunus）海神
3 アポロー　Apollo, Apolon　（アポロン Apollon）太陽神
4 アレス　Aress　（マルス Mars）戰爭神
5 ヘルメス　Hermes　（マーキユリー Marcurius）風神
6 ヘフエスト　Hephaesos　（ヴアルカン Vulcanus）火神
7 ヘスチア　Hestra　（ヴエスター Vesta）爐の女神
8 デメテール　Demeter　（セレース Ceres）穀物神
9 ヘーラ　Hera　（ジユノー Juno）ゼウスの妃
10 アテナ　Athena　（ミネルバ Minerva）智慧、技術の神
11 アフロデテー　Aphrodite　（ヴイナス Venus）美の女神
12 アルテミス　Artemis　（ダイアナ Diana）月の女神

所　版

有　權

11. 4. 16

昭和十一年四月十三日印刷
昭和十一年四月十七日發行

心理解剖室

定價貳圓

著者　式場隆三郎

發行者　鹽谷晴如
東京市神田區一ッ橋三丁目九

印刷者　中村禎臣
東京市神田區神保町三ノ二九

東京・神田・一ッ橋・教育會館
サイレン社
振替東京八三二八一
電話九段四一五一—五

印刷・宏英社印刷所

三上於菟吉著 隨筆わが漂泊 ノート判 二・三〇

三上於菟吉著 青空無限城 四六判 一・六〇

長谷川時雨著 隨筆草魚 四六判 一・四〇

魯迅著 増田涉譯註 支那小説史 菊五・〇〇判

三上於菟吉著 燃える處女林 四六判 一・八〇

ダベンポート著 大江專一譯 軍需王ザハロフ 四六判 一・五〇

石坂洋次郎著 金魚 ノート判 二・〇〇

林房雄著 浪曼主義者の手帖 ノート判 一・八〇

スタンダール著 齊田禮門著 パルムの僧院 四六大判 三・二〇

藤澤桓夫著 大阪の話 ノート判 二・〇〇

サント・ブウヴ著 石川湧譯 わが毒舌 四六判 一・八〇

岡本綺堂譯著 支那怪奇小説集 四六判 二・〇〇

眞山青果著 隨筆瀧澤馬琴 ノート判 二・五〇

三上於菟吉著 探偵小説幽靈賊 四六判 一・二〇

安田德太郎著 社會診察錄 四六大判 二・三〇

トオマス・マン著 土方定一譯 文學論 四六判 一・八〇

曹禺著 山・邢影共譯 戲曲雷雨 ノート判 二・〇〇

清水幾太郎著 日本文化形態論 四六判 一・八〇

長谷川時雨著 近代美人傳 菊判 三・五〇

三上於菟吉著 艶説隱れ蓑 ノート判 一・八〇

マイヤース著 寺田鼎譯 トレント殺害事件 四六大判 一・二〇

クヤイン著 大矩譯 希臘柩の祕密 四六大判 一・二〇

東京・神田・一ツ橋 教育會館 サイレン社 振替東京 八三二八一番

60
1400

終